

受入番号	記布場
97-40125	資セ

中学校

平成 8 年 度

教育研究員研究報告書

音 楽

東京都教育委員会

平成8年度

教 育 研 究 員 名 簿 (音楽)

区 市 町 村 名	学 校 名	氏 名
台 東 区	台東区立御徒町中学校	館 野 ゆかり
墨 田 区	墨田区立吾嬬第二中学校	○ 宮 沢 順 子
目 黒 区	目黒区立第九中学校	及 部 智 司
北 区	北区立富士見中学校	内 野 雅 晶
練 馬 区	練馬区立開進第二中学校	森 岡 美奈子
足 立 区	足立区立伊興中学校	宇 野 浩 之
八 王 子 市	八王子市立松木中学校	佐 川 由美子
三 鷹 市	三鷹市立第七中学校	西 尾 晃 明
府 中 市	府中市立府中第一中学校	◎ 小 島 邦 昭
東 大 和 市	東大和市立第一中学校	荒 川 徳 子

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 指導部高等学校教育指導課指導主事 山 下 哲

研究主題

生徒一人一人が課題を見つけ、考える力を伸ばし、豊かな感性を育てる指導の在り方

目 次

I	主題設定の理由	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	4
1	器楽領域	
・	現状と問題点	4
・	指導事例「ラテン音楽の曲想を生かし、アンサンブルの楽しみを味わう」 (第2学年)	5
2	創作領域	
・	現状と問題点	9
・	題材事例「リズムを楽しむ」	10
	(第1学年)	
3	鑑賞領域	
・	現状と問題点	15
・	指導事例「モルダウ (ブルタバ)」	16
	(第1学年)	
4	歌唱領域	
・	現状と問題点	19
・	指導事例 「課題意識をもって考えさせることによって、心を豊かにする合唱を目指す」	21
	(第2学年)	
IV	研究のまとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

第15期中央教育審議会は7月19日の答申の中で、「これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに、協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である」と述べている。

これまで、教育研究員音楽部会では、情操豊かな人間を育成するためには、音楽を愛好する心情の育成が重要であると考え、様々な指導内容の研究、指導方法の開発を進めてきた。これらの研究は大きく分けて2つの方向から進められてきた。

- 1 合唱や合奏など、集団による表現活動をできるだけ多く体験させ、表現することの技術を高めることを中心とし、表現の持つ充実感を味わわせる。また、友達と協力し合い一つのことを成し遂げた成就感など、表現活動から派生するさまざまな要素により、生徒の感情にうったえかけることで情操を豊かにする。
- 2 音楽を構成する各種要素（音高、リズム）または、楽譜を理解するとともに、音楽の概念を総合的に認識する力を高めることを重視する。（即興表現や新しい鑑賞指導の試みなど）。

前者は表現活動を充実させることに重きを置いた研究であり、活動すること自体が目的となる傾向がある。しかし、楽しく、生き生きと、表現に取り組むなど生徒たちの情意に迫る指導で、前出の第一次答申の後半の部分（他人とともに、以下）の実現のために効果があるものと考えられる。

後者は表現活動を体験することに比べて、生徒が自ら課題を考えるなど、音楽を理解したり、感じ取ったりすることに重きを置き、知的な理解に重点を置いたものと考えられる。また、一人一人の個性や感じ方を伸ばすことを重視している。このような認知面からの音楽の授業の検討は、第一次答申の前半の部分（自分で課題を見つけ、以下）と深い関わりがあるものと考えられる。いずれも情操を豊かにするという音楽科の究極的な目標を目指したものであり、音楽科の目標を達成するために不可欠である。しかし、教師が日常的にこの2つの方向を見通して、十分授業改善に努めているであろうか。現状は様々な理由から不十分であると言わざるを得ない。

今年度の教育研究員音楽部会一同は、中学校音楽科の本来の目標である豊かな情報を育成するためには情意面、認知面、両面のバランスのとれた指導が必要であると考えた。このために、生徒一人一人に考えさせることに重点を置き、教師が授業で生徒の諸能力のどの部分を、いかに高めていくか、また、音楽の授業を通じて、人間として生徒を、いかに育てて行くべきなのか、という最も基本に立ち返る必要があることを実感した。このため、音楽によって生徒一人一人が自ら「生きる力」を育てていくことを重視し、「生徒一人一人が課題を見つけ、考える力を伸ばし、豊かな感性を育てる指導の在り方」という課題を設定した。あくまでも、生徒が主体であることが本年度の研究の主眼である。教師が各学校における授業において、生徒一人一人が課題を見つけられたか、考える力が伸びたかどうか、丁寧に評価することで生徒一人一人の豊かな感性が育っていくものであると考える。このように評価方法を含め検討することで今年度の研究主題の一層の定着を図りたいと考える。

Ⅱ 研究の経過

【5月】

研究員総会後、月例会において各中学校の指導の現状と課題、生徒の実態について意見を交換し、それに基づき今年度の研究主題について検討を始めた。そして、「生徒の考える力」を伸ばすことを研究主題の中心におくことを決定した。また、研究に当たっては、4つの領域ごとに進めることとした。

【6月】

研究主題について、前回の確認に加えて「感性の育成」についても盛り込む必要があるとの意見が出された。そこで中学校の音楽科の目標を踏まえ、さらに検討を続けることとした。また、領域別にグループを分け、各中学校の現状を具体的かつ詳細に意見交換し検討した。

【7月】

第15期中央教育審議会の第一次答申の内容を検討した。そこで、音楽科として生徒一人一人に「生きる力」をつける必要があるとの考えで一致した。その結果研究主題を発展させ、平成8年度の研究主題を「生徒一人一人が課題を見つけ、考える力を伸ばし、豊かな感性を育てる指導の在り方」とした。また、御岳研究集会に備えて以下の研究方針を確認した。

- ・ 各学校から報告された音楽の授業における指導上の問題点を明確にするために、各学校における年間指導計画をグループで検討する。
- ・ グループごとに、歌唱、器楽、鑑賞、創作それぞれの基本的な課題を抽出し、その解決に向けての指導案を作成する。
- ・ 指導の工夫を具体化するとともに、仮説を設定する。
- ・ 学習指導要領に基づいた研究であることを確認する。

【8月・御岳研究集会】

各研究員の持ち寄った年間指導計画、学習指導案をもとに報告書の作成に向けての分担、各グループごとに課題を焦点化を目指した。その結果つぎの新たな課題が出てきた。

- ・ 合唱や合奏など、一斉指導において、どのように生徒一人一人に課題意識をもたせ考えさせることができるか。
- ・ 生徒一人一人の課題の解決に向け教師がどれだけ支援し評価することができるか。

このように音楽科の最も基本にかかわる課題が検討された。

【9月】

御岳研究集会の成果をもとに、指導法の工夫のさらなる具体化に向け協議を深めた。報告書の作成を念頭においてまとめ方について協議を進めた。

【10月】【11月】

各学校で実証授業を行い検討するなど主にグループ別に臨時定例会を開き、詳細な検討に入った。また、最終的な原稿の推敲と提出。また今後、発表会を念頭に置いて検討を進めることを確認した。

Ⅲ 研究の内容

本年度の研究員一同で各学校における実践を話し合った結果、各領域では様々な報告がなされた。以下はその内容である。

1 器 楽

(1) 現状と問題点

ア 現 状

- ・授業の器楽指導では、使用する楽器に制限がある。主にアルトリコーダー、打楽器、キーボードなどが使われる。
- ・アルトリコーダーが中心となることが多いが、楽器の奏法の習熟に時間がかかる。
- ・多くの生徒は楽器に興味を持っているが、リコーダーに関心を示さない生徒もいる。
- ・技術、技能を身に付けることが中心になりやすい。
- ・生徒はスローテンポな曲よりアップテンポの曲を好む傾向がある。
- ・音楽の好みが多様化している。
- ・音楽経験により、興味、関心、能力に差がある。

イ 問題点

- ・リコーダーだけでなく、様々な国や地域の音楽、楽器にできるだけ多く触れる機会をつくっていく必要があるが不十分である。
- ・多くの生徒は楽器に興味を持っている。しかし、学校の授業では数や種類に限界があるため生徒の望んでいる楽器に十分に触れさせたり、演奏させたりする場面が少ない。
また時間的な面から見ても、合唱コンクールなどの学校行事との関連もあり、楽器に取り組ませる時間を十分に取ることができない。また、実施にあたっては技術指導が中心になりやすい。
- ・教師主導型の一斉授業が中心である。
- ・生徒に考えさせる指導の工夫が十分でない。

(2) 主題と領域との関連

様々な楽器の中で、打楽器は自由な発想でリズムの工夫を意欲的に行わせることが可能である。その理由として、(打楽器の特徴として) 以下のようなことが挙げられる。

- ・比較的音が出しやすい。
- ・音楽経験や読譜力に左右されず、取り組みやすい。
- ・多様な種類があり、メロディー、リズム、ハーモニーを演奏することができるので、幅広い表現ができる。
- ・国や地域、民族によって楽器の種類や特徴も様々で、表現だけではなく、鑑賞することにより、その国、地域や民族についての理解が深まり、国際理解への第一歩となる。

現状や問題点は、一斉授業による技術の伝達や習得が中心となっていることである。ここに、一斉授業についていけない生徒を音楽嫌いにさせてきた背景がある。しかし、これからは生徒一人一人の個性、能力に合わせた課題を与える必要がある。器楽の領域ではリコーダーだけの指導にとどまらず、多くの種類の楽器に触れさせ、体験させる機会を与えたい。また、多様な

楽器の音色の違いを感じ取らせたり、奏法や表現の工夫を考えさせていきたいと考える。

特に打楽器においては、技術的に初歩の段階から高度なものへと幅を広げることができる。また数多くの種類があるので、その中から自分で楽器を選択し、自分なりに曲にふさわしい表現を考えていくことが、一人一人が課題を見付けることにつながると考える。

指導事例 題材名 「ラテン音楽の曲想を生かし、アンサンブルの楽しみを味わう」

(第二学年)

1 題材設定の理由

器楽指導の問題点の一つに、一斉授業による知識や技術の習得に重点が置かれていることが挙げられる。このため生徒が音楽を嫌いになったり、授業についていけなくなったりする主な原因がある。しかし、多くの生徒は楽器に対する強い興味・関心を持っており、これを生かしつつ、生徒一人一人の技術に合わせた課題を設定し、学習を進めていくよう工夫する必要がある。

器楽の領域では、これまでリコーダーの指導に重点が置かれてきたと思われる。リコーダーの指導だけにとどまらず、できるだけ多様な楽器に触れさせ、体験させる機会を多く与えていく必要があるのではないだろうか。

リコーダー本来の良さを感じ取らせるために、ルネサンス、バロック等の音楽に取り組ませることも考えられるが、親しみやすいとは言えない。今年度の研究員のテーマを達成するために、より自由に伸び伸びと演奏させることを目的として、ラテン音楽を取りあげることとした。

題材のラテン音楽は、明るく開放的で、リズムが主体である。生徒にとっては親しみのもてる曲であるので、指導しやすい。リズムも比較的簡単なものから高度なものへと、個人の能力に応じて工夫できる。一人一人が自分のやってみたい楽器を選択し、アンサンブルの中で自分の役割を認識して、自由に表現する喜びを味わわせたいと思う。また、リズムの宝庫ともいわれているラテン諸国の音楽に触れることにより、広く世界の音楽や民族について知ることは、国際理解にもつながるものと考え、本主題を設定した。

2 指導目標

- (1) ラテン音楽に興味を持たせ、軽快なラテンリズムを味わわせる。
- (2) グループ練習を通して、お互い協力し助け合う心を養う。
- (3) アンサンブルを通して、響きや表現を工夫させる。
- (4) 発表の場を設け、合奏を主体的につくりあげる努力をさせる。
- (5) 広く世界の音楽に触れることにより、国際理解を深める。

3 教 材

- (1) 「車にゆられて」 佐木 敏 作詩 メキシコ民謡
- (2) 「ティファナ サンバ」 M. A. ブランド 作曲

4 指導計画 (5 時間扱い)

第1次 (2 時間)

- ・「車にゆられて」「ティファナ サンバ」の旋律を視唱する。
- ・ラテン音楽のビデオを見て、特徴を話し合う。

- ・リズムパターンを利用して、リズム打ちの練習をする。
- ・ラテン楽器の奏法を学ぶ。

第2次（3時間） 本時

- ・ソプラノリコーダー、アルトリコーダーの運指を確認し、パート練習をする。
- ・グループ編成を行い、担当する楽器を決める。
- ・グループごとに、曲想やリズムを工夫して練習する。
- ・中間発表をし、相互評価をする。
- ・中間発表をもとに、さらに曲にふさわしい表現を工夫する。
- ・グループ発表を行い、相互評価を学習カードに記入する。

5 評価計画

第1次

- ・ラテン音楽に興味深く聴くことができたか。
- ・「車にゆられて」「ティファナ サンバ」の曲の特徴をつかみ、ふさわしい表現を工夫しようとしたか。
- ・リズムパターンを曲の中に生かす工夫ができたか。
- ・ラテン楽器の奏法を理解し、楽しんで演奏できたか。

第2次

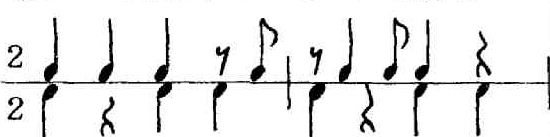
- ・自分の役割を認識し、友達と協力して演奏できたか。
- ・楽器の組み合わせや表現上の効果を考えて工夫したか。
- ・他のグループの良い点を発見しようとしたか。

6 学習指導の展開

(1) 第2次（2時間目）の目標

- ・サンバの基本リズムパターンを理解し、さらに工夫させる。
- ・アンサンブルを通し、相互に協力し合い、楽しく演奏させる。
- ・楽器の組み合わせや表現の工夫をさせる。
- ・他のグループの良い点を発見させる。

(2) 展 開

	指 導 内 容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	○発声練習	○音楽係の指示で、メトロノームを用いてブレスコントロールを行う。 ○「ハイハイハイ」で発声練習。	○ブレスを意識させる。 ○音程に注意させる。
	○前時の復習	○「ティファナ サンバ」の旋律を歌う。 ○サンバの基本リズムパターンの練習。 	○リズムを感じて歌うことができたか確認させる。 ○片手打ち、両手打ちなど、リズムの取り方について助言する。

7 まとめ

器楽領域では、ラテン楽器を加えてグループアンサンブルの授業形態をとった。実証授業のアンサンブルの発表を通して、生徒の明らかに変化してきた点は、これまで音楽の授業で目立たなかった生徒がギターやラテンパーカッションに強い興味を示し、積極的に演奏に参加しようとする意欲がみられたことである。

また、グループ練習を通して、生徒一人一人がリズムを工夫したり、他の生徒の演奏に集中する姿がみられた。また、他のグループの良い点を積極的に取り入れようとする姿勢もみられた。

この結果、日常的に何気なく耳にしているリズムや音が実は、サンバやマンボで使われていたということを知り、ラテン諸国の音楽を身近に感じる事が出来た。また、これを機会にラテン諸国の文化や歴史に対して興味をもったり、卒業後も長く音楽に親しんでもらいたいと考える。

2年 音楽科 学習点検カード		2年 組 番氏名
1. 担当楽器は何ですか。		ボニョー
2. 自分の楽器で工夫した事は何か。		
3. あなたのグループはどんな点を工夫しましたか。		カベサ マカリス
4. グループにどんな点で協力できましたか。		
5. 合奏をした感想を書いて下さい。		カウナル
6. 他のグループで良かった入は誰ですか。又、どんな点が良かったですか。	さん	
	さん	

GRADE 6
Playing Time 3:00

ADAGIO ♩ = 50

TIJUANA SAMBA

by Morris Allen Brand

Grade 6 Percussion Music Score for **TIJUANA SAMBA** by Morris Allen Brand. The score is for a Grade 6 ensemble and includes parts for various percussion instruments. The tempo is marked **ADAGIO** with a metronome marking of $\text{♩} = 50$. The playing time is 3:00.

The instruments listed on the left are:

- Perc I (Bells) (Claves)
- Perc II (Xylo) (C.B.)
- Perc III (Mar.) (Bongos)
- Perc IV (Vibes)
- Perc V (Chimes)
- Perc VI (S.D.) (Maracas)
- Perc VII (Cym.) (Tamb. Ten-Dr.) (Tri. Guiro)
- Perc VIII (4 Tompani)

The score includes various musical notations such as **Bells**, **S.D.**, **Crash Cym.**, **Tom-Tom**, and **FFFF**. It also includes dynamic markings like **ff** and **ff**, and articulation markings like **Stacc.** and **Stacc.**. The score is written for a 4/4 time signature.

2 創 作

(1) 現状と問題点

研究に先立って、創作領域の指導について各学校の実状を意見交換したが、今年度の研究員は、ほとんどこの分野を授業で取り上げていないことが分かった。以下はその理由である。

- ① 表現領域の「歌唱」「器楽」及び鑑賞領域に授業時間の多くを費やしている。
- ② 教師が創作領域の指導内容、指導方法について十分理解していない。

創作領域を担当するグループで検討した結果、創作指導を充実することにより、生徒の表現活動が、より豊かになるのではないかと考え、さらに検討を進めた。

(2) 主題と領域との関連

創作活動は生徒一人一人が個々の能力に応じて課題を見付けやすい。つまり、一人一人のペースを生かしてとり組ませることができる。このことは次の利点がある。

- ① 表現と比べて、生徒一人一人の演奏技術に直接左右されず課題を設定することができる。
- ② 一斉指導の形態におちいりやすい表現活動に比べて、教師が一人一人の活動を把握、支援しやすい。

つまり、生徒が活動することによっておのずから新しい発見をする。その発見には他の領域の学習の基礎となる部分も含まれているだろう。つまり、創作指導をすることで、生徒の他の領域における諸能力や課題解決を進める力を伸ばすことになると思う。

創作活動により、生徒は音楽的知識の多少にかかわらず自分のアイデアを生かし、表現しながら、さまざまな工夫をし、それを発展させていくことができる。また、その時、微妙な音色の変化やテンポの揺れが音楽をより興味深いものにすることに気が付くであろう。このような指導を通して、注意深く音楽を聴く習慣が身に付き、感性の育成への第一歩となるものと思う。また、自分のアイデアを他の生徒に認めてもらうことも音楽を表現する喜びをさらに深いものとすると思う。

歌唱、器楽の指導では、まず楽譜を再現することによって、感動を見つける段階がある。さらに進むと、再現することに生徒一人一人の個性が盛り込まれることによって、より豊かな表現となる。この時、演奏する生徒も聴き手も、より深い感動を共有することができる。創作指導は、一斉指導の形態を取ることが多い表現に比べて、個人の発想を生かしやすく、教師が指導法を工夫することにより、歌唱や器楽が苦手な生徒の音楽に対する意欲を引き出すことができるものと思う。

また、歌唱、器楽いずれも充実した表現をするためには、ある程度の技術的訓練に時間をかける必要がある。しかし普段の授業で技術的な訓練に多くの時間をとることは難しい。こうした制約の中で本事例のねらいは、生徒一人一人の楽曲の良さを発見する力を伸ばすことにある。ここに創作活動をもっと授業に取り入れるべき理由があるものと思う。すなわち創作活動は、音楽を作るための学習はもちろんであるが、それ以上に

他の領域（表現と鑑賞）の良さや楽しさを分析し発見し引き出す力を伸ばす、つまり音楽の総合力をつけることを目標としている。こうして、創作する楽しみを知った生徒は、将来様々な国・地域の音楽の良さに気づき認める幅広い音楽観を身に付けることができると考える。ここに、音楽科の目標である豊かな感性の育成が達成できるものと考ええる。

指導事例 題材名「リズムを楽しむ」 （第1学年）

1 題材設定の理由

現在の生徒は日常の生活のなかで様々な種類の音楽に触れている。そして共感できる歌詞はすぐ取り入れ自分の言葉とし、気にいったメロディーは口ずさみ、心地よいと感じたリズムには体を動かしている。こうした生徒の傾向を生かして、この題材では自分のアイデアをリズムパターンとして実際に演奏し、それを友達のパターンと組み合わせることでリズムの持つ楽しさを味わわせることをねらいとした。

2 指導目標

- (1) リズムを正確に演奏するための基本的な技能を身に付けさせる。
- (2) 自分でつくったリズムパターンを演奏できる。
- (3) リズムパターンを組み合わせることで表現した楽しさを感じ取らせる。

3 教材

各種打楽器

4 指導計画（2時間扱い）

第1次（1時間）

- (1) 既習曲の演奏や身近な音楽の鑑賞を通してビートを理解させ感じさせる。
- (2) ビートに乗せてリズムパターンを模倣させる。
- (3) 簡単なリズムパターンを考えさせ、グループ内で発表させる。
- (4) 他の人のパターンを聴きそれを模倣させる。
- (5) グループでリズムパターンを組み合わせたアンサンブル練習をさせる。

第2次（1時間）

- (1) 前時のリズムパターンの組み合わせを確認させる。
- (2) リズムパターンをもとに創作をし、いろいろな打楽器で演奏させる。
- (3) 曲の開始と終了のパターンを考え作品にする。
- (4) 作品発表をし、録音して聴き感想を述べさせる。

5 評価計画（評価規準）

第1次

- (1) ビートとリズムの関連に気付いたか。

- (2) 一定の速度を保ち、リズムパターンを模倣できたか。
- (3) リズムパターンの創作に意欲的に取り組んでいるか。
- (4) 他の人のパターンを正しく聴き取り、自分のパターンとの違いに気付いたか。
- (5) グループで協力できたか。

第2次

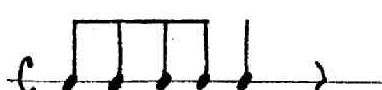
- (1) 打楽器の音色の組み合わせを工夫し表現しようとしたか。
- (2) 作品としてのまとまりを工夫したか。
- (3) 楽しみながら活動できたか。

6 学習指導の展開

(1) 第1次の目標

- ① ビートによってリズムパターンを模倣できる。
- ② 新しい活動に興味を持ち、積極的に取り組む。

(2) 展 開

指導内容	学 習 活 動	指導上の留意点
本時の学習の方向と課題の確認	指揮者に合わせ既習曲を合唱する。 指揮の打点に合わせて手を打つ。 歌詞の文字に合わせて手を打つ。 身近な音楽を聴きビートを打つ。	ビートを意識させるためにメトロノームを使う。
リズムの演奏	曲に合わせて簡単なリズムパターンを打つ。	パターンの繰り返しの楽しさを感じ取らせる。
ビートとはなにか理解できたか。リズムとビートの違いを感じたか。		
	リズムマシンのビートに合わせて教師の示したリズムパターンを模倣する。 [譜例] 1  2  3 	教師が示す際に、強弱や速度に変化をつけて注意深く聴き取らせる工夫をする。 簡単なものから徐々に難しいものにしていく。

	4		
		ビートからずれないで模倣できたか。	
リズムの創作	4拍子で簡単なリズムを1小節考えてみる。 グループのなかで互いに発表しあう。 代表作をひとつ選び、グループ全員で模倣し演奏する。	あまり複雑なものは考えさせずにつくらせる。	
		自分の創意によりパターンをつくれたか。他の人のパターンを模倣できたか。	
	グループで何人かのパターンを組み合わせで演奏する。	休符を活用するよう助言する。 何度も繰り返して演奏させ組み合わせの楽しさに気付かせる。	
		創作に意欲的に取り組んでいたか。グループで協力できたか。	
次時の予告	次時はパターンの演奏の仕方を工夫し、また始まり方や終わり方を考え、作品としてまとめることを知る。		

(3) 第2次の目標

- ① 打楽器の組み合わせの時に音色の工夫ができる。
- ② 協力してひとつの作品を演奏できる。
- ③ グループごとに良い点や工夫した点に気付くことができる。

(4) 展開

指導内容	学 習 活 動	指導上の留意点
本時の学習の方向と課題の確認	学習内容を理解する。 前時のリズムパターンを演奏する。	前時の学習内容との関連を重視させる。自分の創作パターンを確認させる。
リズムパターンの演奏練習	リズムパターンを組み合わせた時に自分のパターンがくずれないように気を付けて、手拍子で練習する。	何度も反復させリズムにのることを感じさせる。

	自然にリズムによって演奏できているか。	
打楽器による演奏	グループで楽器を選択しリズムパターンを演奏する。	打楽器の音色の組み合わせに工夫をさせる。
作品の完成	リズムパターンの演奏の途中で速度や音色の変化をつける工夫をする。曲の始まりと終わりに適するパターンも同様に工夫する。	グループの中で工夫のアイデアを互いに交換し協力し合えるよう支援する。
	いろいろなアイデアを持っていることを認め合っているか。	
作品の発表と評価	グループごとに発表し録画する。工夫した点や良かった点など話し合い発表する。	発表、鑑賞しやすい雰囲気を作る。工夫の生かされている点で生徒が気付かなかったことを取りあげる。
	グループで協力し楽しみながら発表ができたか。自分のグループの録画を見て自分たちの良さを発見できたか。	
まとめ	良いと感じたグループの工夫についてまとめる。また、自分のグループの工夫について自己評価しまとめる。	今後、他の領域と関係させて指導する。

7 まとめ

リズムについては、歌唱や器楽の活動の中で常に指導しているが、生徒の意識の中では何となくとらえているだけで、読みとったり書き取ったりする力は意外に定着していなかった。

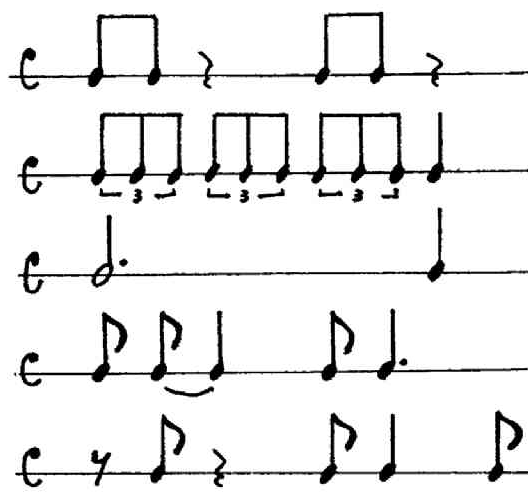
リズムだけとりあげて学習することは、指導する側にとってもあまり機会がなく躊躇する面もあったが、今回のこの研究が一つのきっかけとなり新しい発見ができたと思う。

生徒には、最初何を学ぶのかという戸惑いの姿勢もあったが徐々に積極的になり、楽譜をよむことや楽器の演奏は苦手ということを忘れてアイデアを出し合ったりしていた。簡単なリズムの繰り返しであっても、リズム本来の持つ魅力が生徒たちに次第に理解され、グループで作品が次第にでき上がっていくことは、彼らにとって本当に楽しいことであったようだ。これをきっかけに、他の領域にも興味・関心が広がり、積極的に授業に取り組んでもらいたい。

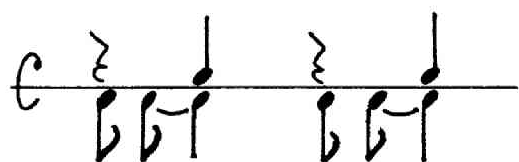
本事例では、生徒と共に考えることで新しい発見や喜びを追求できた。また、生徒の個性を生かした指導の大切さを改めて実感した。

資料

生徒の考えたリズムパターン



生徒の組み合わせたリズムパターン



自己評価カード

リズムについての自己評価、感想

組名

♪自己評価しよう!

- | | |
|----------------|-----------|
| 1. アイディアを出せたか | 5 4 3 2 1 |
| 2. 他の人の意見を聞けたか | 5 4 3 2 1 |
| 3. 協力できたか | 5 4 3 2 1 |
| 4. 集中して取り組めたか | 5 4 3 2 1 |
| 5. 演奏をよく聴けたか | 5 4 3 2 1 |
| 6. 楽しく活動できたか | 5 4 3 2 1 |

リズムパターン

つくったリズムを書いてみよう

♪感想(グループの演奏)

♪他のグループの演奏の感想

3 鑑 賞

(1) 鑑賞指導の現状と問題点は以下のとおりである。

最近の子供たちは、感情をコントロールしたり、言葉でうまく表現したり相手に伝えたりすることが苦手であるといった傾向があり、このことが生徒の問題行動につながっていることがあるのではないかと考える。これからは、教師は鑑賞の指導で、生徒が感情を言葉で的確に表現したり、発表したりできる力を育成していくことが必要であると考え。また、鑑賞の指導は従来、鑑賞後、感じたことを生徒に感想文として書かせる指導が一般的であった。しかしこれからは音楽の聴き方を指導するとともに、感じたことを表現する具体的な方法を丁寧に指導する必要があると考え。つまり、言葉や文章により感情を的確に表現できる能力を育てていく必要があると考え。以下は問題点をまとめたものである。

- ・教師主導型の、音楽の知識を一方向的に教え込む画一化した授業になりやすい。
- ・生徒に考えさせたり、活動させる場面が設定しにくい。
- ・生徒が受け身になりがちである。
- ・生徒が感じたことを表現する具体的な方法を指導する必要がある。

以上の課題の解決に向け、指導方法を工夫することによって、より意欲的に鑑賞する能力や態度を育成できると考える。

(2) 主題と領域の関連

現状と問題点を解決していくためには、授業形態を工夫し、適切な評価場面を設定するとともに、教材を精選する必要がある。また、生徒一人一人が主体的に音楽と関わり、音楽の表現の豊かさや美しさを感じ取れるように指導を工夫する必要がある。このことにより、生徒の感性を育て、自ら学び、考え、判断できる力を伸ばし、最終的に「生きる力」を育成することにつながるのではないかと考える。

まず、授業の前に生徒に本時のねらいを明確にすることが必要である。また、生徒が音楽から受けたイメージを具体的に表現する方法を指導する必要があるため、毎授業ごとに短い時間を鑑賞指導にあて、楽曲の一部または全曲を通して聴き、感じたことをいろいろな言葉で表現したり発表する習慣をつけることも大事である。こうした指導を継続して行うことにより、自分の感じ方と他の生徒の感じ方の違いや共通点に気づき、書いたり発表するための語彙を豊かにすることができると考える。そして、音楽の豊かな表現を感じ取る力を伸ばすことにつながると考える。

1年時より、このように「聴き方の指導」「感じたことを表現する方法の指導」を行っていくことにより、色々な種類の音楽に触れることができる。また、感情を表現する方法もよりスムーズになり、更に音楽の多様な美しさを感じ取ることができると思われる。そして、表現の領域と関連させた内容の指導を工夫することにより、より充実した鑑賞指導になるものと考え。

本事例では、教師は生徒の感性を引き出すように常に心がける必要がある。そのために、選曲の工夫はもちろん、生徒が自分の気持ちと音楽との関わり、日常生活と音楽との関わりを素直に表現し、楽しむことができるよう、授業が単なる知識の伝達にならないよう配慮することが必要である。

指導事例 題材名「モルダウ（ブルタバ）」（第一学年）

1 題材設定理由

標題音楽は、標題を手がかりとして、楽曲に描かれている内容を具体的に想像することができ、音楽による表現の多様さや美しさを感じとらせるのに適している。「モルダウ」の内容は物語性が強く、管弦楽の多彩な表現方法が用いられており、中学生にもわかりやすく、想像力豊かに鑑賞し、豊かな感性を育てていくのに適している楽曲である。また、「モルダウ」の主題の旋律は大変印象的であり、主題の反復と場面の变化もとらえやすい。

日常行っている聴き方の指導の上からも、「内容を知らずに聴く」「内容や標題を知って聴く」などの変化も考えられ、場面ごとに生徒一人一人が想像したことや、楽曲から受けたイメージを表現することにも適していると考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 管弦楽による表現の豊かさ、多様さを感じとらせる。
- (2) 標題と音楽とのかかわりについて考えさせる。
- (3) 楽曲と楽曲の生まれた背景、作曲者について理解させる。

3 教 材

モルダウ（ブルタバ） 連作交響詩「我が祖国」から スメタナ作曲

4 指導計画（2時間扱い）

第1次（1時間）本時

- ・ 標題音楽についておおよその理解をさせる。
- ・ 標題と音楽との関連に気付かせる。
- ・ 標題による表現の変化に気付かせる。

第2次（1時間）

- ・ 管弦楽の楽器の音色とその組み合わせによる表現と効果を感じとらせる。
- ・ 楽曲の作られた時代背景と作曲者について理解させる。

5 評価計画（第1次）

観 点	評 価 項 目	評価方法	評 価 の 機 会
音楽への関心・意欲・態度	・ 標題音楽への意欲的聴取 ・ 楽曲から受けるイメージの感得 ・ 標題と音楽とのかかわりの聴取 ・ 標題を手がかりとした情景の想像	観 察 法 記 述 法 観 察 法 観 察 法 記 述 法	「はげ山の一夜」の鑑賞 学習プリント 「モルダウ」の「源流」「農民の婚礼」 「月光」の場面の鑑賞 話し合い発表活動 「モルダウ」全曲の鑑賞 感想文
鑑賞の能力	・ 標題音楽の内容の聴取 ・ 標題音楽の特徴の理解 ・ 標題と音楽とのかかわりの感得	記 述 法	「はげ山の一夜」の鑑賞 学習プリント 定期考査 「モルダウ」の「源流」「農民の婚礼」 「月光」の場面の鑑賞。学習プリント

6 学習指導の展開

(1) 第1次の目標

- ・この楽曲には標題がついていること、標題の内容について理解させる。
- ・物語や情景とのかかわりに注意しながら、想像豊かに聴かせる。

(2) 展 開

指導内容	学習活動	指導上の留意点
楽曲から受けるイメージの表現	・「はげ山の一夜」の一部分を聴き、感じたイメージと、なぜそのように感じたかを記録し、発表する。	・楽曲の雰囲気、内容の感じ取りやすい部分を抽出する。 ・自由に想像させる。 ・感じたイメージを表現しやすくするように、選択肢を用意する。なぜそう感じたかについてはじっくり考えさせる。
評価の観点 ○初めて聴く楽曲に興味を持って聴こうとしていたか。 ○自分なりのイメージを思い浮かべようとしていたか。		
標題音楽について	・標題音楽について理解する。	・「はげ山の一夜」の内容と、標題音楽について簡単に説明する。
「モルダウ」の主題の鑑賞	・「モルダウ」の主題を聴き、主題の旋律の表現しているものについて理解する。	・「モルダウ」の主題についてのみ、とりあげる。 ・「川の流れ」に沿って物語（楽曲）が進行していることを理解させる。
場面ごとの鑑賞	・「源流」「農民の婚礼」「月光」の場面を聴き、それぞれの部分から感じたイメージとその理由について話し合う。	・情景や内容の想像しやすい場面を抽出して聴かせる。
評価の観点 ○標題音楽について、おおよその理解ができたか。 ○主題の表現しているものが理解できたか。 ○曲から受けたイメージを表現することができたか。		
標題と音楽とのかかわり	・「モルダウ」各場面の標題を知る。 ・話し合いから、それぞれの部分と標題とを結びつける。 ・標題とその情景を想像しながら全曲を鑑賞する。	・前出の「源流」「農民の婚礼」「月光」の場面について扱う。 ・場面のうつりかわりとそれぞれの場面の標題を示しながら聴かせる。

評価の観点

○各場面と標題を結びつけることができたか。

○楽曲に描かれている情景を、標題を手がかりとして想像しながら聴こうとしていたか。

7 まとめ

鑑賞は主観的な面が強く、教師が生徒を客観的に、正しいとか正しくないとか判断しにくい面を持っている。同じ音楽を聴いても、一人一人の感じ方が違うのが当然で教師は、生徒の感じ方の違いを認めていくことが大切である。

また、生徒の音楽的な好みは、これまでの音楽歴や小学校での音楽教育によるところが大きいので、生徒の音楽の嗜好について調査し把握しておくことも鑑賞指導を工夫するに当たって、必要であると考えます。

例えば、

好きな音楽について

1日、どの位音楽を聴いているか。等

また、小学校での音楽経験や音楽の諸能力を把握する例として、

小学校では音楽の時間どんな音楽を鑑賞したか。等

聴かせ方の工夫について

短い時間集中させることから始める。

聴かせるポイントを明確にする。

創造させる際、ヒントとなるような発問を工夫する。

楽器や音色の特徴や効果を聴き取らせる。

演奏形態や音楽の構成を知る。

作曲家の生き方や作品の時代背景について理解する。

1年 音楽鑑賞記録

組()氏名

モルダウ (フルタバ)

連作交響詩「我が祖国」より

スメタナ 作曲

○モルダウ (フルタバ)とは……

チェコを流れる川。

○標題音楽とは……

風景、物語、人物などをオーケストラで表現する音楽。

鑑賞① 3つの場面について、曲を聴いて情景や表現されているもの(こと)を想像してみましょう。

場面	曲から受けたイメージ・想像したもの(こと)
(1)	コロコロした川の流れ。 小島もまわりにいる。
(2)	朝の風景。なめらかなどけい。 なにかが始まるような感じ。
(3)	森のびんびん葉に入っている。

② 3つの場面と標題とを結びつけてみましょう。

〈標題〉

この川は2つの水源から流れ出る

先に輝きながら川幅を増す

場面(1) 森からは鈴りの音笛が聞こえる

場面(2) 結晶を流す村人の踊りを見られる

場面(3) 夜には星と月光に輝く水面に水の妖精が踊る

・聖ヨハネの洗礼で水はけきとあける

・ゴッホの丘を仰ぎ見ながら流れ出る

○作曲家と楽曲の生れに背景について

作曲家(本国籍) スメタナ (チェコ)

・調べたこと、知っていること。

チェコを代表する作曲家。ブラハマ、ビョルンと作曲を学んだ後、指揮者や作曲家として活躍した。当時のチェコは独立した国家ではなかった。

・友だちの発表や先生の話から分かったこと。

「我が祖国」は、チェコの自然や伝統に基づいた6曲の交響詩からなる。「モルダウ」は2曲目。
・他国の支配に苦しむ祖国への思いを、音楽にした。
・国民愛の作曲家。「モルダウ」をかきあげた時には、耳が聴こえなくなっていた。

鑑賞② 全曲を聴いて

場面ごとの変化がよくわかってよかった。

川が何かあるようだった。

盛りあがる所があった。

単元の内容を振り返って

・モルダウの主題はどれか。今から選ぼう。

④ B C

・主題の表しているものは何か。今から選ぼう。

A ⑤ C

・場面ごとに想像ができてよかった。

④ B C

・標題音楽について 今から選ぼう。

A ⑤ C

・作曲家や曲のつくりかたの背景などについて 今から選ぼう。

④ B C

・積極的に調べたり、発表を聞いたりしてよかった。

A ⑤ C

・先生から…… 場面ごとの想像ができてよかった。

(1)の「小島もまわり」…… スメタナが……

4 歌 唱

(1) 現状と問題点

歌唱の領域における現状と問題点は以下のとおりである。

- ・男女の人数のバランスが偏っていることにより、混声合唱の形態を工夫する必要がある。
- ・2年生の授業は3年生と同様に、時間数の実質的な減少で継続的な学習が難しい。このため、効率的に合唱曲を仕上げることを優先しがちで指導内容が深まらない。
- ・生徒が課題意識を持って学習活動に取り組む機会が少ない。その結果、受身的になりがちで、達成感、満足感などが十分得にくい。
- ・詩や曲の内容の分析などを通して、表現を深める指導が不足している。
- ・学習の過程で録音を活用する機会が少ない。そのため生徒が課題意識を持って学習に取り組んだ場合でも、結果を十分フィードバックできていない。

(2) 主題と領域との関連

ア 「考える力」の必要性

教師にはそれぞれ授業に対する理想とするイメージがあり、そのイメージに生徒をあてはめる傾向が強い。また、生徒に十分考えさせる間もなく、教師が課題点を指摘したり、解決の具体的方法を指示する傾向がある。その結果、合唱の授業は教師主導の傾向が依然強く、生徒一人一人の考える力を生かしきれていないのではないかという問題点が明確になった。また、毎日の授業の中では時間的制約を無視する訳にはいかず、ある程度の仕上がりで次に進まざるを得ないことも多い。しかし、生徒により豊かな合唱体験をさせたいとの願いから、授業では、合唱曲を仕上げることを主たる目標とするのではなく、生徒の「考える力」を育てる必要があると考える。本事例では生徒一人一人に考えさせる授業を念頭において検討を進めた。

毎日の授業では、適切な課題を投げかけると共に、生徒の「なぜだろう」という意識を丁寧に汲みあげることが必要と考える。例えば、発声指導の際、教師が羞恥心のある年頃の生徒に「口を大きく開けなさい」と一方的に指示をしても、それは生徒にとって単なる強制にとらえがちである。「どうしたら豊かな響きの声が出せるか」ということを生徒一人一人に考えさせたり、効果的に模範（教師の声、視聴覚ソフト、上級生の録音等）を聴かせることで、「あんな声を出してみたい」という向上心を育て、生徒自身が豊かな響きの声を求める欲求を持つように指導を工夫する必要がある。

課題は歌唱の授業のあらゆる場面において、設定することが可能である。学習の過程において生徒一人一人に課題意識を持たせ考えさせることによって、個々の生徒の疑問や悩みに的確に答えるきめの細かい評価をすることにより、達成感、満足感のある合唱を作り上げることができると思う。

イ 指導の実際

合唱の授業の流れを通してどのような授業の可能性があるか、各場面ごとに考えてみた。

① 声の出し方

声の出し方について、中学生の発達段階では変声に対する配慮から、理論的に無理のない指導が必要である。「まず大きい声を出しなさい！」という指導が効果をあげる場合もあるが、よりきめ細かく生徒の実態に合わせた指導の必要がある。しかし、発声法について指導しても、生徒一人一人が課題意識を持って学習しなければ十分な効果が期待できない。生徒一人一人の声の悩みをていねいに汲み上げるためには、学習カードを利用して記入させることが効果的である。このカードを基に個人的にアドバイスすることにより、一斉指導の問題点のある程度改善することができるのではないかと考える。

② パート練習

パート練習では、練習計画の段階から生徒に考えさせる必要がある。その際、パートリーダーの果たす役割が大きい。練習に入る前の全体に対する説明は教師が行う。次のことを具体的かつ、分かりやすく説明する。

- ・練習はパートリーダーを中心に自主的に行う。
- ・お互いに工夫し合い、十分に練習すること。
- ・次の練習課題を常に考えること。

パートごとに取り組み方に違いがあるが、本事例では生徒に課題意識をもって工夫させることを重視した。以下はその実践例である。

	生徒の課題意識
初期の段階	・分からない音を伴奏者にピアノで弾いてもらう。 ・先生に弾いてもらう。 ・響きの良い場所で歌いたい。
中期の段階	・他のパートの音取りテープを聴きながら歌いたい。 ・伴奏テープで歌いたい。 ・無伴奏で歌いたい。 ・メトロノームを使いたい。 ・他のパートと練習したい。 ・録音して聴いてみたい。
後期の段階	・響きのない所で歌いたい。 ・範唱CDを聴いて上手な演奏の工夫を考えたい。 ・パートごとに連絡をとって合唱をしたい。 ・パート発表会をしたい。 ・ビデオに撮り表情を確かめたい。 ・指揮者と合わせて歌いたい。

指導事例 題材名 「課題意識をもって考えさせることによって、
心を豊かにする合唱を目指す」(第二学年)

1 題材設定の理由

歌唱を通して、豊かな感性を培うことは、音楽の授業の基本である。合唱は豊かな心を育て、豊かな音楽観を身に付けさせ、音楽的諸能力を伸ばすための重要性を担っている。しかし一斉授業が中心であることが多く、生徒一人一人の個性や能力を十分に発揮させてきたであろうか、また、考えさせる場面が少なかったのではないかと思う。そこで本事例では、自分の声について知ることと音楽の表現を工夫させることに重点を置いた。

2 指導目標

- (1) 生徒一人一人が、自分の声についての課題を見付ける。
- (2) パート練習を自主的に行うことができる。
- (3) イメージをもって、曲にふさわしい表現を工夫させる。
- (4) 演奏する楽しさ、表現する喜び、感動を味わわせる。

3 教 材

混声三部合唱「春に」 谷川俊太郎作詞 木下牧子作曲

- ・2年生として表現力を高める上で適当である。
- ・表現する上でイメージを持ちやすい。
- ・中学生の心情に合っていて意欲的に取り組める。
- ・詩の内容、言葉を意識して歌わせる指導がしやすい。

4 指導計画(8時間扱い)

第1次(1時間)

- ・CDを聴き曲の感じをつかむ。
- ・各自がこの曲での課題を考える。
- ・歌詞を読む。
- ・最初の4小節を歌う。

第2次(4時間) 本時

- ・各パートごとに練習計画を立てる。
- ・パート練習の仕方を工夫する。
- ・全パートで合わせて合唱する。

第3次(3時間)

- ・歌詞のみのプリントを配布して
記号等を記入する。
- ・まとめの合唱をする。
- ・記号、標語などの確認をする。
- ・録音をとり、課題を見付ける。

5 評価計画

- ・各自この曲での発声の課題を見付けることができたか。
- ・パート練習の計画をきちんと立てたか。
- ・パートごとに協力して自主的に練習できたか。
- ・曲にふさわしい表現をするように考えて演奏したか。
- ・各自、各パートの課題を解決できたか。

6 学習の展開

(1) 第2次の目標

- ① 各パートにあったパート練習を考え、協力してパート練習を行うことができる。
- ② リズムや音程を正確にとり、三部合唱をすることができる。

(2) 学習活動の展開

指導内容	学習活動	指導上の留意点
既習曲による導入	既習曲、または発声ドリルによる導入。	・姿勢、口のあけ方、声の出し方に注意するよう指示する。 ・一番歌える曲を歌わせる。 ・歌う雰囲気を作るようにする。 ・音程が不安なパートの手助けをする。
前時の復習	初めの4小節を合唱する。	
本時の練習	本時、練習する部分（～25小節）と、その部分の到達目標を（各パートが正しく音程がとれるようにする。協力してパート練習をする）を説明する。 パート練習方法の確認。前時より変更があれば、変更する。 パートごとに練習方法カードを黒板に貼る。 〔練習カード〕 ① テープで練習 ② ピアノ等の鍵盤楽器で練習 ③ 歌える人について歌う ④ 先生におまかせ	・みんなが到達できる目標を設定する。 ・自分たちにあったパート練習方法を選択できるよう助言する。
パート練習	歌詞カードをあらかじめ3パート分黒板に貼っておき、それを各パートに配る。 各パートごとに自分たちの決めた練習方法で練習を進める。	・歌詞カードの使い方について説明する。 ・パートリーダーを中心に、みんなで協力して練習させる。 ・どうしてもわからない場合は手助けをする。 ・正しく自己評価させる。
パートごとの発表	音取りが達成された部分の歌詞カードを元の場所にパートリーダーが貼る。 パートごとに歌ってみて、達成度を確認する。 自己評価を見直す。	・歌える部分と歌えない部分をはっきり認識させる。気付かないことは指摘したり助言する。

パート練習	もう一度パートごとに分かれて、達成できていない部分の反復練習及び練習方法の見直しをする。 歌詞カードを黒板に貼り直す。	
三部合唱	三部合唱に挑戦してみる。 録音をして聴く。	・自分たちの良い点、悪い点を認識させる。 (姿勢、口のあけ方、音程、リズム)
評価	各パートリーダーがパートの自己評価をする。 パート練習チェックカードに記入。	
次時の予告	次の授業の予告をする。	・良かった点、改善点を確認する。

7 まとめ

このように生徒はいろいろと考え、工夫してパート練習を行った。ただし、生徒の工夫だけでは、練習成果を上げるには限界があり、行き詰まってしまう傾向がある。より効果的にパート練習を行うためには、教師が常に生徒の状況と、一人一人のどこがどのように改善されたかを把握し、丁寧に評価することで指導法の改善をさらに押し進める必要がある。

困っていませんか？ 声の出し方	年 組 氏 名
あなたの悩み	
息の吸い方・口の開け方・立つ姿勢・ひっくり返る・かすれる・喉が痛い 長く歌えない・高い声を出したいが出ない・低い声を出したいが出ない 恥ずかしい・笑っちゃう・場所をかえたい・1時間目は調子が出ない	
言葉または項目を○で囲む。	

※ 先生からのアドバイス

自分の声の音域を調べよう

[illegible]

合唱曲名(大地讚頌)

あなたの得意パート			
ソプラノ	アルト	テナー	バス
		○	

IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

今年度の音楽部会では、第15期中央教育審議会の第一次答申を受け、研究主題を設定した。また、歌唱、器楽、鑑賞、創作の領域ごとに研究を進めた。

【器楽領域】

アルトリコーダーが中心となる傾向があった授業を再考し、できるだけ多種多様な楽器を加えてグループアンサンブルさせることに重点を置いた。特に広く諸外国の民族音楽に親しませるために、ラテン音楽を取り扱った。ラテン音楽は理論にとらわれることが比較的少なく、教師が工夫次第で、生徒一人一人の自由な発想や工夫をかなり引き出すことができると考えた。

実施した結果、これまで以上に積極的にアンサンブルに取り組む姿勢がみられた。様々なラテンパーカッションに対する生徒の興味関心が強く、今後教材の開発が期待できる。

【創作領域】

生徒の興味をできるだけ引き出すために、リズム創作を中心に研究を進めた。リズムパターンを創作し、表現して聴きあうことで、友達との感じ方の違いに気づき、自分の感じ方や個性についても考えさせることができると思われる。今後他の領域といかに関連づけるかが課題である。

【鑑賞領域】

鑑賞指導により豊かな感性を育てていくには、まず、毎日の授業の中で目的をもって、感覚や意識を集中して聴く必要がある。指導を工夫することで、うまく習慣化できるのではないかと考えた。そのため、毎日5分程度の鑑賞を実施し、できるだけ多くの音楽に触れさせたいと考えた。また、音楽について記録したり、発表したりすることも重視した。本事例のモルダウについては、最初内容について説明しないで、できるだけ生徒の自由な想像力を引き出す工夫をした。今後は表現領域といかに関連させながら鑑賞をおこなうかが課題である。

【歌唱領域】

歌唱の領域では、合唱の授業を通して、どうすれば生徒一人一人が自分にあった課題を見つけ、学習に取り組んでいけるかを検討した。そこで、生徒一人一人に音域チェックカード等を活用させることによって、自分の音域や発声上の課題を意識できるよう指導を工夫した。また、パート練習では、「一人一人が主体的に練習できたか」「友達と協力できたか」などについて学習カードを活用して、自己評価させることにより、合唱することにより深く、一人一人の意識を深めることを目指した。結果として、教師のさまざまな工夫によって、生徒の考える力を伸ばすことができた。しかし、普段の授業では、授業時数等の関係で、どうしても合唱を仕上げることが優先しがちである。今後さらに検討を加えていく必要がある。

2 今後の課題

中学校における音楽教育は集団による表現を中心に行われることが多いが、今後、一人一人の個性や感じ方をいかに伸ばすか、工夫することが中学校における音楽教育で求められる。こうして、表現もさらに深化し充実し、生徒の生涯を通じての財産となるものとする。